

他力

「位職便り」



第十三号（平成二十七年三月）

専徳寺住職 弘中満雄

【訪う（とぶらう）】

前に生まれん者は後と導き、
後に生まれん者は前と訪へ。（道綽）

お浄土へ生まれ仏とられた方は、再度この娑婆に戻って、後に生まれるべき私たちを導いてくださいます。「あなたも、この度の人間境涯に生まれた本当の喜びに出遇ってください」と喚んでくださいます。

「弔う（悲しむ、死者をなぐさめる）」のではなく「訪う（訪問する）」のです。故人の言葉を胸に、私もお浄土への道を訪ねて参ります。それがお聴聞の道です。

【鶯籠】

春くれば、梅にとまり、鶯の
法きけようの、こえとたのしむ（仲造）

蓮如上人が病気で療養されていた時の事、弟子の空善坊がウグイスを入れた籠を持参してお見舞いにこられました。

「ホー、ホケキヨ♪」

美しい鳴き声を聞いて少しでも心をお慰めしたいと思われたのでしょうか。しかし鳴き声を聞いた上人は鳥を籠から解き放ち、「鳥類だに『法を聞け、法を聞け』と鳴く。なんぞ同行聴聞せざるや」と言われました。

法とは仏法、同行とは私たちの事です。蓮如上人は、「仏法に出遇わなかったら、私たちはいつまでも籠の中の鳥と同じだよ」と、おっしゃりたかったのでしょうか。単なる気なぐさめでなく、深くて広い如来（真如・真実から来た方。仏の事）のへ救いへの話を聞く。その事を教えてくれたウグイスへお礼を言つて、自然に帰されたのです。



【籠とは】

元気で若い方は言われます。「宗教・信仰なんて、今の時代はナンセンス（無意味）だ。所詮、弱者の逃げ、病人の麻酔薬、年寄りの慰めものに過ぎない。それに何と言っても人間は自由でなければならぬ。宗教や信仰、教義や法事で縛られるなんておかしい。」
ご意見、至極もつとも聞こえますが、本当にそうでしょうか？

「縛られたくない。私は自由になりたい」と言いつつ、自らの狭い了見で物事を見定めていくこの私です。「あれは善、これは悪」と勝手に枠にはめ、気づけば自ら籠をつくってとじこもっているのです。

他でもなく、自分自身に執られてしまうのです。「一人でやれる」と自惚れ、遂には自己中心で身動きできない私がいいます。

籠：それは自分自身も気づいていない自己中心的な心（煩惱）です。知らず知らず、自ら編みつづけた脱出不可な檻です。

仏法はその境遇からの解放が目的です。逃げ口上や麻酔薬、慰め物ではありません。

【籠を破る】

そして私たちの仏法とは、阿弥陀さま側の話、他力の教えです。一生涯、籠編みやめられない私と見抜いて、「籠の中のあなたへ必ず到り届くぞ」と誓われた阿弥陀さまの話を聞くのです。

「ホーホケキヨ♪（法、聞けよう）」
それは別れたあの方の喚び声かもしれない。せん。あらゆるご縁に導かれ、お浄土への道、念仏の道を歩ませていただきます。